

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

スペイン語の間投詞ehと日本語の終助詞「よ」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 明衣, Nomura, Mei メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1834

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



スペイン語の間投詞 eh と日本語の終助詞「よ」

野村明衣

0. はじめに

スペイン語の間投詞には、他の品詞から転用したものと、語意を持たないものがある。その中で eh は語意を持たないものに分類されるが、ah や oh など話し手の感情表出を表すものとは異なり、文頭や文末に現れ、聞き手への呼びかけ、念押し、忠告、非難など、かなり直接的に聞き手に働きかける（山田他 1995: 133）。しかし、語意を持たない eh がなぜこのような機能を果たすのだろうか。先行研究で挙げられる呼びかけや念押しなどの機能を、日本語の終助詞「よ」の機能と比べることによって、情報伝達時における eh の機能を統一的に捉えてみたい。

1. スペイン語の間投詞 eh

1.1. 先行研究

1.1.1. 語用論的機能

eh に関する先行研究のほとんどは、語用論的機能に関するものである。これは eh が語意を持たないため、動詞から転用した ¿sabes? など他の間投詞と比べて、抽象度が極めて高いためであろう。先行研究には、Blas Arroyo (1995)、Briz (1998)、Ramírez (2003)、Montes (2005)、García (2005)、Rodríguez Muñoz (2009) などがあり、これらの考察が共通して挙げている機能が5つある。まず発話強調¹で、García (2005: 94) はこの場合、tenerlo en cuenta で言い換えられるという。第2は発話緩和である。これは先に述べた発話強調と正反対のものであり、Luna (1996: 110) は、FTA² (face threatening acts 面子侵害行為) に伴う場合にこの機能を果たすことがあるという。しかし発話緩和とは、強勢をつけて ¡eh! と発音するか、あるいは上昇音調の ¿eh? かに関わる問題であって、eh が果たす機能そのものではないように思われる。第3に聞き手の同意、理解を要求する機能で、¿de acuerdo? などに対応するという (García 2005: 95)。そして第4が、特別な意味を持たないはさみ語 (フィラー) とし

1 Rodríguez Muñoz (2009: 93) は eh について intensificador と説明し、García (2005: 100) は「話し手方向」(orientación hacia el emisor) と述べている。

2 “Some acts intrinsically threaten face; those ‘face threatening acts’ will be referred to henceforth as FTAs.” (Brown & Levinson 1978: 60)

ての用法、最後に、怒りや驚き、喜びなど様々な感情 (modalización) を表す機能である。しかし、これも発話状況に応じて音調が反映するものであると考えられるため、本稿でどのような感情を表すかを明確に定義するのは難しいだろう。

1.1.2. 共起する発話による機能

Ramírez (2003) は、共起する発話ごとに eh がどのような機能を果たすかについて言及している。まず命令の場合、「聞き手に対して命令を実行するよう脅したり、忘れないよう求め」、言明では「存在しない反論に対して発話を再解釈するよう求める」という。この言明の場合の説明は、言い換えると「何か反論があるかもしれないが、発話を受け入れて欲しい」という話し手の要求を表す。また質問に伴う場合、「話し手は、すでに質問の答えが分かっているように聞いており、聞き手に質問を再解釈するよう求める」機能を果たすのだという。さらに、感謝や祝福に伴うと発話を強調し、挨拶と共起する場合には、「話し手の強い決心を表す」という。Blas Arroyo (1993: 106) も別れの挨拶に伴う場合、「別れが持つネガティブな要素を和らげる」機能があるとし、*¿eh?* によって「申し訳ないが、行かなければならないので理解して欲しい」という話し手の態度を表す、と述べている。この点に関しては後ほど詳しく考察するが、共起する発話との関連から eh の機能を見ると、聞き手に対して発話への理解を求め、発話内容を強調すると要約できるのではないだろうか。そのため、前節で述べた発話緩和の機能は、やはり eh が本来果たすものではないと思われる。発話緩和という機能が、eh を伴うことによって発話が丁寧に聞こえることを意味するとすれば、それは共起する発話が FFA³ (face flattering acts 面子追従行為) であるためであろう。例えば挨拶は、Goffman (1967; 1982: 41) によると、本来人間関係の強化と修復を図る行為であり、これに発話を強調する eh を伴うことにより、聞き手に対する親密さをより明示することになり、結果的に発話が丁寧に聞こえると考えられる。

1.1.3. 現れる位置による機能

eh は、文頭では注意喚起 (Luna 1996: 110)、恥じらい (Montes 1999: 1311) の機能を果たす。しかし、語意を持たない eh が話し手の恥じらいを表すとは

3 “Es, pues, indispensable prever un lugar en el modelo teórico para esos actos que, de algunas maneras, son la pendiente positiva de los FTAs, actos valorizadores de la imagen del otro, que proponemos llamar actos, “agradadores” de imagen (en adelante FFAs, por el inglés face flattering acts).” (Kerbrat-Orecchioni 2004: 43)

考えにくく、これは、はさみ語（フィラー）と考えられないだろうか。つまり、恥じらっている間のつなぎ語として、eh を用いるということである。また文間では、恥じらい（Montes 1999: 1311）、交感的言語使用⁴（función fática）（Briz 1998: 226）の機能を持ち、文末では、先行発話の強調（García 2005: 95, Montañez Mesas 2007: 14）や、聞き手に発話内容の確認を要求する（Montañez Mesas 2007: 10）。さらに、単独で用いられた場合は、¿cómo? や ¿qué dices? の代わりとなると説明されている（Blas Arroyo 1995: 98）。しかし単独での用法について、Montañez Mesas（2007: 8）は、他の位置で現れる場合と異なり、談話標識ではないと指摘している。本稿は、情報伝達時における eh がどのように聞き手に働きかけるかの解明を目的としているため、はさみ語や交感的言語使用としての文間および単独の例は扱わず、文頭および文末の用例についてのみ考察する。

このように eh は様々な説明がなされているが、もっと統一的に説明することはできないだろうか。次節では、実例を通して eh の機能を考察していく。

1.2. 実例による考察

1.2.1. eh の例数と共起する文の種類

先行研究に挙げられている eh の機能を検証するため、スペイン映画 20 作品の科白からデータを収集した⁵。資料に映画の科白を用いたのは、映画では一人芝居もなく発話場面も映し出されるため、演劇における発話と比べると、より自然な会話であると考えられるためである。なお、時代や地域によって差があると予測されるため、比較的新しく、方言があまり現れないスペイン映画を資料に選んだ。本稿で用いたデータ中、eh は 142 例得られ、うち文頭の例は 16 例、文末は 86 例であった⁶。これら 102 例をもとに機能を検討していこう。また、Ramírez（2003）の指摘を検証するため、eh を伴う発話を意味ごとに分類した⁷。次の表 1 は、その結果を位置ごとに示したものである。

4 自由で目的のない社会的交際で使用される言葉（phatic communion）（Malinowski 1954: 315）

5 このデータは、まず科白にある eh を数え、さらに実際に映像を見て俳優がアドリブで用いた表現も含めた。科白にある eh が、映像では省略される場合もあったが、科白にあるものは脚本家はその場面で自然である、必要であると判断し用いていると考えられるため、映像で省略されていても科白にあるものは例数に含めた。

6 142 例の内訳は、文頭 16 例、文中（主節と従属節、条件節と帰結節の間の例）が 1 例、文間（等位接続、並列的接続の間の例）10 例、文末 86 例、単独 29 例である。なお、位置による分類は科白の文字表記を基準とした。発話が eh で始まり、後にコンマが付いている用例を「文頭」、eh の前にコンマがあり、かつ後ろに疑問符がついている用例を「文末」の用例とみなした。

7 Searle（1969）の 5 つの言語行為（言明、行為指示、行為拘束、宣言、感情表現）と、用例で観察された質問を加え分類した。なお、行為拘束及び宣言は eh を伴う例がなかったため

表1 ehを伴う発話の機能

発話の機能	位置		合計
	文頭	文末	
言明	3	40	43
行為指示	7	22	29
感情表現 ⁸	0	7	7
質問	6	17	23
合計	16	86	102

最も多く eh を伴っていたのは言明（主張、説明）で、次に行為指示（命令）、質問と続く。Blas Arroyo（1993）などが指摘する挨拶を含む感情表現にも例が見られた。また、文頭の例では肯定形 eh が現れたが、文末ではほぼ疑問形 ¿eh? であった。これは、位置による機能と何らかの関わりがあるのだろうか。文頭、文末での機能を検討した後に考察しよう。

1.2.2. 文頭の用例

では、まずは文頭の例から見ていこう。次の例は、トラック運転手である Manolo と妻 Catalina が口論する場面の発話である。

(1) Manolo: En cuanto vuelva nos vamos a la playa: tendremos pagados dos plazos del camión.

Catalina: El camión, el camión, estoy harta de oír hablar del camión, no me vuelvas a nombrar el camión, por favor.

Manolo: Eh, oye, pero ¿qué te crees, que me voy de vacaciones?, ¿te crees que me gusta pasarme los días comiendo en bares de carretera, solo, como un perro, echando de menos a mis hijos?

(Manolito Gafotas: 80)

(1) では、仕事ばかりだと責める Catalina に Manolo が反論する。eh は文頭に位置し、「仕事に行くのが休暇だとでも思っているのか」と問う後続発話へ聞き手の注意を喚起している。またこの例では、eh の後ろに oye が現れている。動詞 oír の命令法 2 人称単数形 oye は間投詞的に用いられ、聞き手の注意

いめ、省略する。

8 Searle（1969）は挨拶を感情表現に含んでいないが、Haverkate（1993: 152）は挨拶も含まれると規定している。

を喚起する。同じ注意喚起の2つの表現によって、より強く聞き手に注意を促すよう要求すると考えられる。次の例も見てみよう。

(2) [Ahora Rafa coge el balón y tira un penalti. Chuta fuerte y por el centro.

Fernando se agacha para que no le dé. Gol.]

Fernando: Eh, Rafa, qué pasa, tío, ten cuidado, coño, qué quieres, que me lesiono antes del domingo o qué...

(*El penalti más largo del mundo*: 94)

(2) では故意にボールをぶつけようとした Rafa に対して、Fernando が文句を言う場面である。この場面でも、eh が文頭に現れて、聞き手の注意喚起をしている。(1) は oye が現れていたが、ここでは eh の後に呼びかけ語を伴っている。情報伝達前の呼びかけ語は、聞き手の注意を後続発話へ喚起する機能を果たすため(野村 2012: 53)、(1) と同様に、eh と共に聞き手の注意を喚起すると考えられる。本稿のデータでは文頭の eh は 16 例観察されたが、そのうち 7 例に eh の後に oye や呼びかけ語、あるいは人称代名詞 tú を伴っていた。聞き手の注意喚起という同様の機能を果たす語が共起して現れていることから、eh、oye、文頭の呼びかけ語には何らかの機能の差があると推測される。oye は動詞の命令法から転用したものであり文字通り「聞け」を意味する。また、呼びかけ語は聞き手の名前を呼ぶ行為であり、滝浦 (2008: 16) は、誰もが自分自身だと認識するものである個人名を呼ぶことで、話し手は聞き手の領域に声でふれることになる」と述べている。つまり、聞き手の名前を呼ぶというのは、話し手が聞き手に声で触れられる関係であることを表明する行為なのである。これに対して、eh は語意を持たない音声であり、注意喚起として用いた場合、他の表現と比べると、聞き手の肩を突然叩くかのように、聞き手に配慮しないぞんざいさが現れるのではないだろうか。(1)、(2) どちらの例でも、話し手は聞き手に対して腹を立てており、oye や文頭の呼びかけの前にぞんざいな印象を与える eh を伴っていると考えられる。

1.2.3. 文末の用例

次に文末の例を、発話の意味ごとに見ていこう。

1.2.3.1. 命令の例

まず、命令の例である。次の例は、3人組だったバンドのメンバーの1人が急に抜けてしまい、レコード会社との打ち合わせを目前にどう行動するかを問

う場面の発話である。

(3) Leo: Carmen, que ha llamado Ernesto, que a las doce nos ve en la discografía...

Fredy: ¿Vais a ir sin Chus? ¿Ahora sois un dúo?

Carmen: ¡No me estreséis!, ¿eh? (El Calentito: 40)

これからどうするのかを問う Leo と Fredy に対する「プレッシャーをかけるな」という命令に話し手 Carmen は、¿eh? を用いる。¿eh? が命令に共起した場合、「聞き手に対して命令を実行するよう脅したり、忘れないよう求める (Ramírez 2003)」という規定を当てはめると、¿eh? を伴うことによって単なる命令ではなく、より聞き手に働きかけ、命令内容を理解し、これ以上 Carmen に質問を投げかけないようにするなどの具体的な行為を求めると考えられる。もう 1 例見てみよう。

(4) [Antonio asiente, algo más tranquilo. Saca de su cartera las entradas y se las da al niño. A Juan se le agrandan los ojos. Antonio le mira con ternura y le da un cachete en la cabeza.]

Juan: ¿Puedo enseñárselas a Ángel?

Antonio: Venga, pero no las pierdas, ¿eh? (Te doy mis ojos: 54-55)

(4) では、父親である Antonio からもらったチケットを友達に見せたいと言う息子 Juan に対して、失くさないように告げる場面である。この例でも ¿eh? を用いることによって、単に「失くすな」という命令だけでなく、失くさないよう注意してポケットにしまうなど、命令内容を遂行するための具体的な行為を要求していると解釈できる。

1.2.3.2. 言明の例

(5) Alicia: (Mosqueada.) ¿Qué pasa, me estás siguiendo?

Benigno: No, bueno sí...

[A Alicia le extraña que lo reconozca, tal vez por eso sigue hablando con él.]

Alicia: (Huraña.) ¿Qué quieres?

Benigno: (Se saca la carterita del bolsillo.) Creo que esto es tuyo... Se te ha debido caer...

[Le devuelve la cartera.]

Alicia: (Sonríe, como premio.) Gracias.

[Mira dentro de la cartera, sin darse cuenta de que es una descortesía.]

Benigno: (Naif.) ¿Está todo?

Alicia: (Un poco avergonzada.) Sí...

Benigno: Yo no he tocado nada, ¿eh?

Alicia: Gracias.

(*Hable con ella*: 97)

(5) は、Alicia の財布を拾った Benigno が、財布の中身を確認する Alicia に対して（中身は）何も触っていないと主張する場面である。この例における Benigno の発話は、「もし何かなくなっても、自分は何も触っていない」という意味であり、¿eh? を伴うことによって、財布の中身がなくなっていないか疑っている Alicia に対して、自らの潔白を強調し、発話への理解を求めていると考えられる。これは Ramírez (2003) が説明していた、言明に伴う場合には「存在しない反論に対して発話を再解釈するよう求める」という機能に当てはまるだろう。次は言明に含まれる説明の例である。

(6) Locutora: Nos interesa mucho esa amiga que muere justo el día que desaparece tu madre, ¡cuéntame!

Agustina: ¿El qué?

Locutora: Esa amiga que murió en el incendio, hay rumores...

Agustina: Yo no creo en los rumores.

Locutora: Yo tampoco. Me refiero a lo que le dijiste a la redactora, algo muy importante de esa mujer y de su marido, que los relaciona con la desaparición de tu madre. ¿Es verdad o no, Agustina?

Agustina: (Cambia de actitud, tímida pero contundente.) De eso... prefiero no hablar. Sólo eran suposiciones mías.

Locutora: (Exasperada.) ¡Agustina, estás aquí para hablar de tu madre y de esa señora!, ¿eh?

(*Volver*: 152- 153)

(6) は、失踪した母親を探す Agustina がテレビ番組に出演し、Locutora に母親に関する情報を話すよう要求される場面である。Locutora は同時期に失踪した母親の友人のことを話したがる Agustina に対して、「あなたはその女性について話すためにここにいるのよ」と告げ、Agustina が何のために番組に出演しているかを理解させようとしている。さらにこの後にも母親の友人について話すよう促す場面があるため、¿eh? を伴うことにより、Agustina が今置かれ

ている立場について語る発話への再解釈を求めていると言えるだろう。

1.2.3.3. 質問の例

また、質問に *¿eh?* を伴うことによって「話し手はすでに答えが分かっている状態で聞いており、聞き手に質問を再解釈するよう求める (Ramírez 2003)」という。次の例は、尊厳死を求める Ramón の兄である José が、息子である Javi に Ramón の協力をしていることを批判する場面である。

(7) José: *¿Se puede saber qué hacías tú ahí? ¿Acaso sabes de qué están hablando y qué es lo que quieren?*

Javi: *¿Y qué hago? ¿Me encierro en la habitación?*

José: *¡¿Te das cuenta de lo que quieren?!*

[José suelta a su hijo, da un paso atrás y se cruza de brazos.]

José: *A ver, ¿qué pasa si ganan los juicios, eh? ¿Qué pasa? Que a tu tío le ponen una inyección y le matan, como a un perro.*

(*Mar adentro*: 101)

(7) において、José が Javi に「裁判で Ramón が勝ったらどうなるか」と問う発話に *¿eh?* を用いている。この場面では *¿eh?* の後に聞き手 Javi の返答を求めず、José 自身が「(裁判に勝ったら) 薬で殺されるんだぞ」と質問に対して答えている。つまり、José は、自らの質問の内容の答えを分かっているが、あえて Javi に質問することによって事の重大さを理解させようとしているのである。ここでも Ramírez (2003) の規定が当てはまる。もう 1 例見てみよう。

(8) [Toni (que viene puesto hasta arriba de anfetetas) está con Sara, Marta y Carmen en el almacén. Marta y Carmen le miran con cara de odio.]

Toni: (A Sara.) *¿Cómo no iba a venir, eh? Y más sabiendo que ahora eres una Sioux... Qué fuerte, la Sarita encima de un escenario... (A Carmen) Yo soy fan vuestro a muerte. No me pierdo un concierto, ¿verdad, Sara?*

(*El Calentito*: 124)

(8) は、Siux の新メンバーとなった Sara の元恋人 Toni が、ステージに立つ Sara に *¿Cómo no iba a venir, eh?* と発話をする。Sara と Toni は喧嘩別れをしたため気まずい関係にあるが、Toni はもともと Siux のファンだったため、自分がライブに来ないなんてあり得ない、という気持ちを質問形式で表している。

この場合にも ¿eh? を伴うことによって、話し手はあえて質問し、発話への理解を聞き手に要求していると考えられる。この用法は、eh が持つ強調の機能を質問内容へ向けることによって、質問が含む発話意図を聞き手に理解させようとする効果をもたらすと言えるだろう。

1.2.3.4. 感情表現の例

感謝、謝罪、挨拶など感情表現に分類される発話に ¿eh? を伴うと発話の強調になるという (Ramírez 2003)。次の (9) は財布を拾ってくれた聞き手に対する感謝の例、(10) は依頼していたベビーシッターを急遽キャンセルした話し手の謝罪の例である。

(9) [Llegan a la mitad de la calle, Alicia se detiene.]

Alicia: Bueno, ya hemos llegado. Gracias por la cartera, ¿eh?

[Le tiende la mano, para despedirse.]

(Hable con ella: 98)

(10) [...y adusta, abre la puerta. Una chica joven la sonríe.]

Canguro: Hola...

Angela: Hola. No.. no voy a necesitarte...

Canguro: Pues ya he dicho que no a otro sitio.

Angela: Ya... Espera... te pago y se acabó. (...)

[Angela se aproxima a la chica y la entrega un par de billetes.]

Angela: Perdona, ¿eh? Lo siento.

Canguro: Vale, gracias.

(Solo mía: 58)

どちらの例も ¿eh? を伴うことによって、単なる感謝や謝罪ではなく、より聞き手に働きかけ、感謝や謝罪を受け取るよう求めているのだろう。Ramírez (2003) の「強調」という説明は、そのような機能を意味すると考えられる。次に、挨拶の例である。

(11) Marta: ¿Te vas?

Tomás: Sí. Tengo que ir un momento al puerto.

Marta: Ah, bien... hasta luego.

Tomás: Hasta luego. Adiós, ¿eh?

(Nubes de verano: 42)

Blas Arroyo (1993: 106) は挨拶に伴う ¿eh? について、「別れが持つネガティブな要素を和らげる」とし、¿eh? を伴うことによって「申し訳ないけど、行かなければならないので理解して欲しい」という話し手の態度を表すと述べている。しかし、(11) では話し手 Tomás が挨拶をする前に聞き手である Marta も別れの挨拶をしており、Blas Arroyo (1993) の言うような含みは感じられない。このような場合の ¿eh? は、話し手が行かなければならない状況への理解ではなく、挨拶という行為そのものへの理解を求めると考えられないだろうか。先に見たように、挨拶とは本来人間関係の強化と修復を図る行為であり、Goffman (1967; 1982: 41) は「別れの挨拶は、この出会いが彼らの間の関係に及ぼした影響を総括し、参加者が次回に会うときに期待するものが何かを示すものである」と説明している。この規定に従うと、挨拶に発話強調の機能を果たす ¿eh? を伴うことにより、それまでの聞き手とのやりとりを思い起こして、話し手と聞き手が協調関係にあることを示す行為がより強調され、結果的に発話が丁寧に聞こえるのではないだろうか。つまり、¿eh? の使用によって、聞き手に人間関係の強化である挨拶への理解を求めているということである。

このように、¿eh? は発話内容を強調し、聞き手に発話に対する理解を求め機能を果たす。先行研究では発話緩和なども ¿eh? の機能に挙げられていたが、実例による考察の結果、発話緩和は FFA の強調であるため、先行する発話内容の強調が eh の中心的機能と言えるだろう。では、肯定形 eh と疑問形 ¿eh? には何らかの差があるのだろうか。文頭では肯定形 eh が現れるのに対して、文末ではほぼ疑問形 ¿eh? であった。これは、疑問形の場合には聞き手に対する要求を含むため、要求内容が示された後の文末に現れやすいためだと考えられないだろうか。文頭では発話内容に直接的に関わらず、単に後続発話へ注意喚起するにとどまる。従って文頭では疑問形式 ¿eh? は現れない。一方、文末では発話内容を強調したり、聞き手の理解を求めため、疑問形となるのである。

では、語意を持たない音声であるはずの eh が、なぜ先行発話へ理解を求め機能を果たすのだろうか。例えば、文末に現れる ¿entiendes? は、動詞 *entender* の語意から聞き手に先行発話への理解を求めることは明らかである。しかし eh はそうではない。Ramírez (2003) の指摘は実には的を得ているが、なぜ eh を伴うと発話の再解釈を求めるような機能を持つのかは言及していない。調べた限りではこの点に関する詳しい記述は見当たらない。

2. 日本語の終助詞「よ」

2.1. 「よ」の機能

一方、日本語の終助詞は、それ自体意味を持たないが、発話の中で用いられると発話時における話し手の心的態度の表現形式となる。終助詞「よ」は、「ね」と共に、益岡（1991）に代表される、話し手と聞き手の知識の一致・不一致など様々な観点から研究されている。

2.1.1. 「よ」の聞き手めあて性

「よ」は「ね」の機能と比較されることが多いが、白川（1992）は「よ」がつく場合とつかない場合との対比から、「よ」の機能を考察している。

(12) 良雄「おう」

実 「なんだよ？（と襖閉める）」

良雄「さがしたんだぞ、随分」

実 「フン」

良雄「仕様がねえから、あの子と映画一本見て、別れたよ」

実 「好きにやってくれよ」

（白川 1992: 38-39）

白川（1992）は、この例において「よ」を削除すると「どこかすわりの悪い文になる」とし、一般的には、聞き手の知らないことを言う述べ立て⁹の文では「よ」を付加するのが普通である、と説明する。また、「よ」は「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」と定義づけている。これは言い換えると、「よ」の使用によって「あなたに向けて話しているのだ」ということを聞き手に強く示すということになる。本稿では、これを聞き手めあて性と呼ぶことにする。

2.1.2. 聞き手への働きかけ

田窪（1992: 23）は「よ」を、「情報を間接知識領域¹⁰に記載せよ」という指示であり、「これを今関与的な知識状態に付け加えたのち、適当な推論を行え」と説明している。つまり「よ」の使用により、話し手は聞き手に対して発話内容への理解を求め、そこから推論される行為を実行するよう指示するのである。

9 述べ立てとは、話し手の視覚や聴覚などを通して捉えられた世界やある事柄についての話し手の判断・解釈を述べ伝えるといった話し手の発話・伝達の態度である。（仁田 1989: 33）

10 間接知識とは、言語的に獲得された知識・情報を指す。（田窪 1992: 23）

(13) 行きますよ。(下線筆者)

(田窪 1992: 23)

田窪 (1992) によると、(13) の発話は、話し手は聞き手に対して単に「行く」ことを伝達しているだけでなく、「早く支度しなさい」、「出てきて挨拶しなさい」などの情報が含まれる。また、記載を指示される情報は、基本的に聞き手にとって新規の情報であるが、「既存の知識の再記載により、相手に推論を促し、帰結の正しさを相手の知っている情報により導かせることができる」という。

(14) そんなこと知らないはずがないでしょう。私は弁護士ですよ。

(下線筆者)

(田窪 1992: 24)

(14) のように、聞き手にとっての既知情報にあえて「よ」を用いて、情報の再記載を求めることによって、発話内容の正当性を強調し、発話内容への理解を強く求めるのである。

一方、伊豆原 (2001: 41) は、「外いじりしている夫が雨に気付いたとき、洗濯物を見やりながら家の中の妻に言うのは、普通『雨だよ』であって、『雨だね』ではあるまい」と指摘し、「よ」は聞き手の注意を喚起し、状況に従って判断するように促すときに用いられ、話し手の主張や強調といった含意を持つのだ、と説明している。この規定に従えば、「雨だよ」という場合には、夫は家の中にいる妻に対して洗濯物を取り込むのを手伝うなど、何らかの行動を促すことになる。伊豆原 (2001) は、これを「聞き手の注意喚起」としている点が田窪 (1992) とは異なるが、どちらの考察も、「よ」が聞き手に対して、発話から導き出される判断を実行するよう求める機能を果たすと指摘するものである。

さらに、伊豆原 (1993) は、文頭に現れる「よ」について例を挙げている。

(15) A: よ、元気。

B: うん、元気。

(伊豆原 1993: 108)

(15) の用法について、伊豆原 (1993) は詳しい言及はしていないが、このような「よ」は、年齢差のないかなり親しい間柄のみで許されるものであり、改まった場面での使用は困難である。これは「よ」が持つ聞き手めあて性が、情報伝達前には呼びかけとして強く現れ、配慮なしに聞き手に踏み込むため

はないだろうか。(15)の「よ」が「ね(え)¹¹」であったとすれば、「よ」の場合よりも柔らかい印象を与えるだろう。伊豆原(1993: 104)も指摘しているように、「ね」が文頭で用いられた場合、話し手がこれから始めようとする話(あるいはこれまで進めてきた話)に聞き手を引き込もうとする機能があるためである。また、滝浦(2008: 138)によると、「ね」の意味素性は[+聞き手]で、「聞き手への共有の確認・促し」の意味を持ち、「よ」の意味素性は[+話し手]で、「話し手の一方的言明」である。「ね」が、話し手が聞き手に近づき、共有を求めるのに対して、「よ」は聞き手との共有を求めない一方的言明であり、この性質が白川(1992)の指摘した「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」という指摘と結びつくのだろう。白川(1992)は文末の「よ」の性質に関するものであったが、これは文頭の場合にも当てはまると考えられる。

従って、「よ」は、それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることをことさら表明し、発話から導き出される判断を実行するよう求める機能を果たす、と要約できよう。

3. スペイン語の間投詞 eh と日本語の終助詞「よ」

前節で、スペイン語の間投詞 eh は先行発話へ理解を求めたり、発話内容を強調する機能を果たすことが明らかとなった。eh が語意を持たない音声であるのに、そのような機能を有することを、日本語の終助詞「よ」の機能を当てはめて考えられはしないだろうか。eh を、白川(1992)の「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明する」という「よ」の機能と同様と考えると、Ramírez(2003)のいう聞き手に対して発話に対する理解を求める eh の機能と、田窪(1992)と伊豆原(2001)の、発話から導き出される判断を実行するよう求める「よ」の説明は、どちらも聞き手に発話への理解を求めるという点で一致していると言える。これらを伴うことで発話の聞き手めあて性がより強まり、結果的にそこから推測される行為を要求するのである。この視点から、eh の例をもう一度見てみよう。

(3) Carmen: ¡No me estreséis!, ¿eh?

(*El Calentito*: 40)

命令は、聞き手の存在がなくては成り立たない行為であり、もともと聞き手めあて性が高いと考えられるが、そこへ聞き手に向けられていることをことさ

11 「ねえ」は感動詞であるが、伊豆原(1993)は感動詞、間投詞、終助詞の「ね」を「聞き手との共有」と統一的に説明しているため、本稿でもこの立場に従って統一的に捉える。

ら表明する *eh* を用いることによって、命令内容を理解し、実行するよう求めるのではないだろうか。また、質問も同様に聞き手めあて性が高い。

(7) José: A ver, ¿qué pasa si ganan los juicios, *eh*? ¿Qué pasa? Que a tu tío le ponen una inyección y le matan, como a un perro.

(*Mar adentro*: 101)

本来聞き手めあて性を持つ質問に、さらに *eh* を伴って聞き手めあて性を高める。そうすることで、なぜ話し手がその質問をしているかを考えるよう聞き手に働きかける。「話し手はすでに答えが分かっているかをあえて聞いており、聞き手に質問を再解釈するよう求める (Ramírez 2003)」のは、聞き手めあて性の強調によって生まれる含みを意味しているのだろう。また、この場合聞き手 Javi も質問の答えを分かっていると考えられるため、「既存の知識の再記載により、相手に推論を促し、帰結の正しさを相手の知っている情報により導かせることができる (田窪 1992: 23)」という「よ」の説明を当てはめることができるだろう。では、言明の場合はどうだろうか。

(6) Locutora: ¡Agustina, estás aquí para hablar de tu madre y de esa señora!, *eh*?

(*Volver*: 152- 153)

この場合にも、*eh* が聞き手に向けられていることをことさら表明していると考え、Ramírez (2003) の「存在しない反論に対して発話を再解釈するよう求める」という規定は、話し手の発話が聞き手を説得することを目的としていることを表すため、発話内容の再解釈を求めるのではないだろうか。次に、感情表現の例も見てみよう。

(9) Alicia: Bueno, ya hemos llegado. Gracias por la cartera, *eh*?

(*Hable con ella*: 98)

eh を伴うことによって、「感謝や祝福に伴うと発話を強調する (Ramírez 2003)」のは、*eh* が、感謝が聞き手に向けられていることを示すためであると説明できる。しかし白川 (1992: 39) は、「よ」がないと「どこかすわりの悪い文になる」と指摘するが、*eh* の場合はそうではない。*eh* がなくても「よ」のようにすわりが悪くなることはないが、*eh* が発話が聞き手に向けられていることを、ことさら表明しており、そこから発話への理解を求める含意が生ま

れるという点では「よ」と一致していると言えるだろう。では文頭での用例も見てみよう。

- (1) Manolo: Eh, oye, pero ¿qué te crees, que me voy de vacaciones?, ¿te crees que me gusta pasarme los días comiendo en bares de carretera, solo, como un perro, echando de menos a mis hijos?
(*Manolito Gafotas*: 80)

「よ」が呼びかけとして文頭で用いられるのは、聞き手に配慮しない関係のみであり、改まった場面で使用できないのは、「よ」は聞き手めあて性が強く、聞き手への配慮なしに聞き手に踏み込むためであると考えた。eh が語意を持たず、注意喚起として用いられた場合、呼びかけ語など他の表現と比べてぞんざいな感じがするのは、「よ」と同様に、聞き手めあて性が強く、聞き手への配慮なく踏み込むためではないだろうか。冒頭で述べた eh の規定（山田 他 1995: 133）は、全て eh の聞き手めあて性によって、文頭では呼びかけとして注意喚起、文末では、発話が聞き手に向けられていることを表明して発話内容への理解を求めることから念押しや忠告、非難などの含みが現れると説明できるだろう。

このように考えると、「よ」と eh の機能は非常に類似していると言える。日本語の終助詞「よ」の研究をスペイン語の間投詞 eh の機能分析に援用することにより、これまで明らかにされてこなかった eh の機能をより明確にすることができるのではないだろうか。

4. eh と ¿no?、「よ」と「ね」

4.1. ¿no? と ¿eh?¹²

eh の機能が明らかになったところで、¿no? の機能と比べてみることにする。¿no? は、話し手の持つ情報の不確実性 (inseguridad) を表し (Ortega 1985: 243)、聞き手に情報を確認 (corroborar) する機能を果たす (García 2005: 91, Rodríguez Muñoz 2009: 88, etc.)。

- (16) Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿no? (Los lunes al sol: 51)

(16) は、話し手 Santa が聞き手である Lino の妻が夜勤であるかを問う場面である。この場合、発話内容が事実かどうかを判断する、つまり妻が夜勤であ

12 この節で挙げた先行研究では eh は疑問形 ¿eh? で書かれてる。

るかを知っているのは聞き手である。ここで ¿no? を伴わないと、聞き手が所有する情報を話し手が断言することになり、不自然な発話となろう。García (2005: 89, 97) と Blas Arroyo (1995: 96) は、¿no? と ¿eh? が、話し手の発話態度を表し、聞き手の意見を確かめる点で共通している」と指摘している。話し手の発話態度とは、¿no? を用いて、聞き手に情報の真偽の確認を頼ることで、発話が柔らかく聞こえること、また ¿eh? によって話し手の発話へ理解を求め、発話内容を強調しようとすることであろう。¿no? は聞き手の意見を求め、¿eh? は聞き手に理解を求めるということも含まれると考えられる。さらに García (2005: 100) は、¿no? は聞き手方向 (orientación hacia el destinatario)、¿eh? は話し手方向 (orientación hacia el emisor) であるという。¿no?、¿eh? どちらも聞き手への発話という点では同じだが、聞き手の判断や知識など聞き手を重視する ¿no? と、話し手の判断などを伝達する、話し手重視の ¿eh? は、全く逆の機能を果たすのである。では、先ほどの (16) を ¿eh? に変えるとどうだろうか。

(16)' Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿eh?

¿no? を ¿eh? に変えると、話し手も聞き手も妻が夜勤であることを知っており、話し手が何らかの意図により ¿eh? を用いて強調していると考えられる。同じ発話でも聞き手重視の ¿no? と話して重視の ¿eh? とは、情報伝達上全く異なる機能を果たすのである。また、García (2005: 96) は、感謝や約束に伴う ¿eh? は「¿no? に置き換えることができない」と主張している。その理由は、感謝や約束は「話し手に由来するものであり、聞き手に確認することはできない」ためであるという。これは、感謝や約束（謝罪も含まれるだろう）は、話し手が有する情報であるため、聞き手の情報に頼る ¿no? の性質と合わないということだろう。

4.2. ¿no? と「ね」、eh と「よ」

では、¿no?、eh と日本語の終助詞との対応はどうだろうか。一般に付加疑問と呼ばれる ¿no? と eh は、和佐 (2005: 20- 21)¹³ を含め、従来終助詞「ね」、「よ」との対応が指摘されてきた。前節に挙げた García (2005: 100) の ¿no? を聞き手方向、eh を話し手方向とする説明を、¿no? が聞き手重視、eh が話し手重視と解釈すると、滝浦 (2008: 138) による、「ね」の意味素性 [+聞き手] と、「よ」の意味素性 [+話し手] は一致している。また、Maynard (1993: 208) も、

13 和佐 (2005: 20- 21) は ¿verdad? も含めている。

「ね」を person-interaction-oriented、「よ」を object-information-oriented と言及している。object-information-oriented というのは、「(話し手の) 情報方向」と解釈できるため、表現方法は異なるが、これらの定義は概ね一致していると思われる。また、(16) の例が ¿no? を伴わないと、明らかに聞き手に属する情報を話し手が断言するため、不自然な発話となるのは、神尾 (1990: 64) による情報の縄張り理論で挙げられている「君の奥さん病気だそうだね。」という例で、「ね」を省いた場合の不自然さとの共通性が窺える。このように、¿no? と「ね」は、聞き手を重視するものであり、eh と「よ」は話し手からの情報を重視するという点で共通していると言えるだろう。しかし、「ね」は文頭で聞き手への注意喚起 (引き込み) として用いることができるのに対して、¿no? は文末で現れて¹⁴、先行発話の内容を聞き手に確認する機能を果たす点で異なる。これに対して、「よ」と eh はどちらも文頭、文末の両方に現れることができるのである。

4.3. 感謝、謝罪に伴う eh、「ね」と「よ」

García (2005: 96) は、感謝などの行為では、eh の代わりに ¿no? を用いることはできず、その理由は「話し手に由来するものであるため」だと説明している。実際に (9) の感謝の例、(10) の謝罪の例でも ¿no? は不自然であると思われる。そして、ここまで考察してきたように、eh は「よ」に対応する機能を持つ。では日本語の感情、謝罪表現の場合はどうだろうか。

(17) ありがとう (う) ね / よ。

(18) すみませんね / *よ。

(19) ごめんね / よ。

日本語の場合、感謝、謝罪では、「よ」よりもむしろ「ね」の方が自然である。この差を両言語の感謝、謝罪表現の形式や語源から考えてみよう。RAE (2001: 1148- 1149) によると、スペイン語の感謝表現 Gracias. は dar gracias と同様の意味を持つため、Gracias. は、Te doy gracias. を含意したものと考えることができる。そうだとすると、動詞は 1 人称単数形であるため、Gracias. は García (2005: 96) の主張する、「話し手に由来するもの」であると言えるだろう。謝罪表現 Lo siento. も 1 人称単数形の動詞から、同様に話し手に由来すると考えられる。一方、同じ謝罪表現の Perdona. は命令である。田中 (1988:

14 Briz (1998: 226) は、¿no? が文中で現れた場合には交感的言語使用 (función fática)、あるいははさみ語としての機能を果たし、「話し手の発話がまだ続くことを表す」と説明している。

290) によると、命令法とは、話し手が自己の意志を聞き手によって実現する形を述べる法であり、これも話し手由来であると言えよう。従って、スペイン語では感謝、謝罪表現は García (2005) の言うように、¿no? で言い換えられないことがわかる。しかし、日本語の場合は聞き手重視の「ね」を伴うことができる¹⁵。語源と発話の形式を考えてみると、感謝表現「ありがとう」は「有り難い」、謝罪表現「すみません」は「済ませぬ」(谷 2009: 76, 79) である。Te doy gracias. などの動詞が 1 人称単数形で、話し手の感情表出であるのに対して、これらは形式上は感情表出ではなく、話し手の判断や解釈を述べる「述べ立て」であり、そもそもの形式がスペイン語と異なる。述べ立てであれば、話し手の一方的言明の性質を持つ「よ」を伴っても問題はなさそうだが、(17) で「よ」が選択されるのは親しい間柄のみであり、(18) で「よ」を用いると謝罪表現としては不適切である。益岡 (1999: 102) は、「ね」の内在的意味を「話し手の意向と聞き手の意向が調和するとの判断を表」すとしており、これを感謝、謝罪表現に当てはめると、話し手の感謝あるいは謝罪に対して、聞き手も同意してくれると期待していると考えられよう。つまり、話し手の感謝などの表明に対して、聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達するのである。一方、「ごめん」は「ご免下され」という許しを請う命令である(谷 2009: 78)。スペイン語では、謝罪表現としての命令に、聞き手の判断を求める ¿no? を伴うと不自然であると考えられるが、日本語の場合は、むしろ「ね」を用いる方が「よ」よりも丁寧に感じられる。命令にも聞き手重視の「ね」を用いることができるのは、先に述べたように、「ね」によって聞き手の判断が入り得る余地を残して伝達することに重点を置いているのではないだろうか。日本語は、感謝や謝意を表明する場合、あくまで聞き手の立場を重視して伝達するのである。これらの表現の対照は、稿を改めて論じたい。

なお、同じ感情表現に分類される挨拶は、今回 Hola. や Buenos días. のような出会いの挨拶には ¿eh? が見られなかった。また、日本語でも別れの挨拶「じゃあね」には終助詞を伴うが、「おはよう」や「さようなら」には現れない。この点に関しても今後考察したい。

5. まとめと今後の課題

スペイン語の間投詞 eh は、日本語の終助詞「よ」と同様に、付加された発話が聞き手へ向けられていることを示すものである。eh と「よ」は、どちらも文末で用いられた場合、発話内容を強調して聞き手に理解を求め、発話から導き出される判断を聞き手に要求する機能を果たす。また、文頭で用いられる

15 このような場合の終助詞について、調べた限りでは詳しい言及が見当たらない。

表 2 eh と「よ」、¿no? と「ね」の機能まとめ

	eh	よ	¿no?	ね
性質	話し手重視 話し手の一方的 伝達	話し手重視 話し手の一方的 伝達	聞き手重視 聞き手の判断・知 識を求める	聞き手重視 聞き手の判断・知 識を求める
文頭	注意喚起 (聞き手への配慮 なし)	注意喚起 (聞き手への配慮 なし)		注意喚起 (引き込み)
文末	発話強調 発話内容理解要求 行為の実行要求	発話強調 発話内容理解要求 行為の実行要求	同意、確認の要求 発話緩和	聞き手との共有 同意、確認の要求 発話緩和

場合、聞き手めあて性が強調されるため、注意喚起としてはぞんざいな印象を与える。

また ¿no? と「ね」は、発話が聞き手重視であることを示し、文末では先行発話の内容を聞き手に確認する機能を果たす。「ね」は文頭でも現れるのに対して、¿no? は文頭での使用は見られない。

以上の eh と「よ」、¿no? と「ね」の機能の対応をまとめたものが、表 2 である。

今後の課題として、先に述べた感謝、謝罪、挨拶表現に伴う終助詞の考察とスペイン語との対照、¿no? の他に終助詞「ね」に対応する表現の検討を挙げる。¿no? に対応するのは主に「これはあなたの本ですね？」のような、確認の機能を持つ「ね」である。しかし「ね」は確認だけでなく、「いい天気ですね」のように、聞き手との情報の共有や一体化を図る機能も有する。このような場合に ¿no? を用いると、聞き手に情報への真偽を強く問う発話となり、日本語の「いい天気ですね」の場合とは大きく異なると思われる。聞き手と情報の共有を表し一体化を図ることは、談話上における人間関係に大きく影響を及ぼし得るものであるため、¿no? の他に「ね」に対応するスペイン語表現を解明することは非常に重要であろう。

スペイン語と日本語は系統的に大きな隔たりがあるが、多くの研究がなされている日本語の終助詞と対照することにより、スペイン語の中だけで考察しては明らかにならない間投詞の機能を、より明らかにすることができると考える。

参考文献

- Blas Arroyo, José Luis (1995) “La interjección como marcador discursivo: el caso de *eh*”, *Anuario de Lingüística Hispánica* 11, Universidad de Valladolid, Valladolid, pp.81-117.
- Briz Gómez, Antonio (1998) *El español coloquial en la conversación. Esbozo de pragmatogramática*, Ariel, Barcelona.
- Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. (1978; 1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- García, María José (2005) “El uso de los apéndices modalizadores *¿no?* y *¿eh?* en español peninsular”, L. Sayahi y M. Westmoreland (eds.), *Selected Proceedings of the First Workshop on Spanish Sociolinguistics*, Somerville, MA, Casdilla Proceedings Project, pp.89-101.
- Goffman, Erving (1967; 1982) *Interaction Ritual -Essays on Face-to-face Behavior*, Pantheon Books, New York.
- Haverkate, Henk (1993) “Acerca de los actos de habla expresivos y comisivos en español”, *Aproximaciones pragmlingüísticas al español. Diálogos Hispánicos* 12, Universiteit van Amsterdam, Amsterdam, pp.149-180.
- Kerbrat-Orecchioni, Cathrine (2004) “¿Es universal la cortesía?”, Bravo, Diana y Antonio Briz (eds.), *Pragmática sociocultural. Estudios sobre el discurso de cortesía en español*, Ariel, Barcelona, pp.39-51.
- Luna, Carmen de (1996) “Cualidades gramaticales y funcionales de las interjecciones españolas”, Thomas Kotschi *et al.* (eds.), *El español hablado y la cultura oral en España e Hispanoamérica*, Vervuert Iberoamericana, Frankfurt, Madrid, pp.95-116.
- Malinowski, Bronislaw (1949) “The problem of meaning in Primitive languages”, C. K. Ogden and I. A. Richards (eds.), *The Meaning of Meaning*, Routledge & Legan Paul, London, pp.296-336.
- Maynard, Senko (1993) *Discourse, Modality, Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*, John Benjamins, Amsterdam.
- Montañez Mesas, Marta Pilar (2007) “Marcadores del discurso y posición final: la forma *¿eh?* en la conversación coloquial española”, *Estudios de Lingüística Universidad de Alicante* 21, Universidad de Valencia, Alicante, pp.1-20.
- Montes, Rosa Graciela (1999) “The development of discourse marker in Spanish: Interjections”, *Journal of Pragmatics* 31, pp.1289-1319.
- Ortega Olivares, J. (1985) “Apéndices modalizadores en español: Los ‘comprobat-

- vos””, *Estudios románicos dedicados al profesor Andrés Soria Ortega I*, Universidad de Granada, Granada, pp.239-255.
- Ramírez Gelbes, Silvia (2003) “La partícula ‘eh’ y la Teoría de la Relevancia. Un ejemplo de contenido procedimental”, *Estudios Filológicos* 38, Universidad Austral de Chile, Valdivia, pp.157-177.
- Real Academia Española (2001) *Diccionario de la Lengua Española*, vigésima segunda edición, Espasa-Calpe, Madrid.
- Rodríguez Muñoz, Francisco J. (2009) “Estudios sobre las funciones pragmadiscursivas de ¿no? y ¿eh? en el español hablado”, *Revista de Lingüística Teoría y Aplicada* 47 (1), Universidad de Concepción, Concepción, pp.83-101.
- Searle, John R. (1969) *Speech Acts. An Essay In the Philosophy of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 伊豆原英子 (1993) 「『ね』と『よ』再考——「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から——」, 『日本語教育』 80号, pp.103-115.
- (2001) 「『ね』と『よ』再再考」, 『愛知学院大学教養部紀要』 第49巻1号, pp.35-49.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報の縄張り理論』, 大修館書店.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版.
- 仁田義雄 (1989) 「述べて立てのモダリティと人称現象」, 『阪大日本語研究』 第1号, pp.31-62.
- 野村明衣 (2012) 「スペイン語における呼びかけ語の位置と機能について」, 『HISPÁNICA』 第56号, pp.47-72.
- 白川博之 (1992) 「終助詞『よ』の機能」, 『日本語教育』 77号, pp.36-48.
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』, 研究社.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」, 『高度な日本語記述文法作成のための基礎的研究』, 平成3年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書, pp.16-26.
- 田中春美 (1988) 『現代言語学辞典』, 成美堂.
- 谷裕子 (2009) 『身近な言葉の語源辞典』, 米川明彦監修, 小学館.
- 和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ』, くろしお出版.
- 山田善郎編 (1995) 『中級スペイン文法』, 白水社.

資料

- Almodóvar, Pedro (2002) *Hable con ella*, Ocho y Medio, Madrid.
- (2006) *Volver*, Ocho y Medio, Madrid.

- Amenábar, Alejandro y Mateo Gil (2004) *Mar adentro*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael (1999) *La lengua de las mariposas*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael y José Luis Cuerda (2008) *Los girasoles ciegos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Balaguer, Javier y Alvaro García Mohedano (2001) *Solo Mía*, Ocho y Medio, Madrid.
- Berger, Pablo (2002) *Torremolinos 73*, Ocho y Medio, Madrid.
- Bollain, Iciar y Alicia Luna (2003) *Te doy mis ojos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Cavestany, Juan y Enrique López Lavigne (2004) *El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*, Ocho y Medio, Madrid.
- Chavarrías, Antonio (2007) *Las vidas de Celia*, Ocho y Medio.
- Gutiérrez, Chus y Juan Carlos Rubio (2005) *El Calentito*, Ocho y Medio, Madrid.
- Hidalgo, Manuel y Felipe Vega (2004) *Nubes de verano*, Ocho y Medio, Madrid.
- León de Aranoa, Fernando y Ignacio del Moral (2002) *Los lunes al sol*, Ocho y Medio, Madrid.
- Lindo, Elvira y Miguel Albaladejo (2003) *Manolito Gafotas*, Ocho y Medio, Madrid.
- Mañas, Achero (2003) *Noviembre*, Ocho y Medio, Madrid.
- Querejeta, Gracia y David Planell (2004) *Héctor*, Ocho y Medio, Madrid.
- Santiago, Roberto (2005) *El penalti más largo del mundo*, Ocho y Medio, Madrid.
- Soler, Antonio (2006) *El camino de los ingleses*, Ocho y Medio, Madrid.
- Toro, Guillermo del (2006) *El laberinto del fauno*, Ocho y Medio, Madrid.
- Urbizu, Enrique y Michel Gaztambide (2007) *La caja 507*, Ocho